

歴史物語 信行の侍女  
永代美知代



(上)

實に運命程不思議に怖ろしいものはありません、何時誰の上に魔の手がかざされるか、測り知られぬが人の身の常とは云へ、十八の花の盛りの勝子は、何も知らず、たゞ一途に、嬉しい楽しい將來を夢みて、うつとりと、いろ／＼な空想に耽つて居りました。

勝子は京都産れの花恥かしい美人で、房々と艶々しい黒髪、くつきりと雪をあざむく眞白な肌匂やかに、織田信行の侍女でありました。

その頃信行の氣に入りの家臣に、津田八彌と云ふ若者がありまして、これがまた、花の枝からこぼれるやうな美男子でありました。

何がさて、繪をらごとに見るやうな美男と美女です、家中は唯もう八彌、勝子の噂で持ち切り、遂には殿様の信行までが、二人を御夫婦に見ようと思召し、改めて八彌に命じて、勝子と結婚の約束をおさせになりました。

「雛様のやうな御夫婦！」  
「眞に似合の御縁！」  
誰も彼も我が事のやうに喜んで、殿様の粹なほか

らひを讃めました。當の本人たる八彌の喜悅、勝子のうれしさ、それはもう申すまでもありません。八彌はもと身分の低い産れでしたけれども、非常な才子でありました。殿様はその才氣をお愛しなすつて、近侍から段々重い役に取り立てられました。八彌の前途は實に光明に輝いて居りました。勝子は將來の幸福を思ふたび、われともなく微笑ますには居られませんでした。

ところが、此處に一人、まことに嫌な男がありまして。

それは同じ織田の家中で信長附きの家老、佐久間七郎左衛門と云ふ、名前からして悪々しい意地悪さうな男です。

佐久間は、津田八彌が何かと殿様から愛されて、メキメキと破格の出世をし、織田家の執事となり、此頃では昔からの家老職たる自分と同じく、肩を並べるやうになつたのを、ひどく嫉んで居りました。その八彌がまた殿様の御仲人で、近々家中一番の美

近く思ひもかけぬ註進に驚ろかされました。

「勝子様！ 一大事で御座ります！」

津田の下僕が息せき切つて、庭先きに打伏しました。

「一大事！」この一言を聞いた時、勝子は恐ろしい胸の動悸にも、しやと。

「もしや八彌様お身の上……。」

「……。」  
下僕は何も云はず泣き伏した。

「さ、委しい話を早う！」  
下僕は涙ながらに話しました。それは昨夜何者と



のやうなお姿にはおなりなされた！」

女たる勝子をめとらうと云ふのですから堪りません、佐久間はもう八彌の幸福を見てゐられなくなりました。そして家中の悪侍を語らひ、ひそかに時機を窺つて居りました。

今日しも初亥の子のうすら寒さに、御殿では爐開きの式がありました。勝子は殿様の御所望で、薄茶を一碗参らせました。

「もう夜も更けた、次ぎへ下つて休息いたせ、大事な花嫁御に風引かせては、八彌にすまぬ。」

などと、殿様からからは、勝子はハツとして顔を染めながら、のがれるやうに御前を下りまして。

「ハハハ、うい奴！」

殿様の御機嫌のいゝお聲が何時までも耳について勝子はそれからそれへと、又しても楽しい將來が思はれるのでした。――

その夜、勝子は何故か眼が冴えて眠れません、さしては怪しい胸の騒ぎをさへ感じるのですが、驕方

も知らぬ覆面、黒装束の侍數人、津田の邸へ忍び

込み、八彌の寝込みを襲ふて殺害し逃げ去つたと云ふのです。

「おー！」

勝子は聞くより早く、現場へ駆けつけました。

見れば、八彌の美しい體軀は、まるで膾のやうに斬りさいなまれ、眼もあてられぬ痛ました。

「八彌様、何者の手にかゝつて、こ

勝子はよよとなき伏しました。泣いて泣いて身も、浮くばかり泣きました。やがて氣を取り直し、キツと帯引きしめた勝子は、仇敵の手が、りもやと、四周に氣をつけました。

天の冥助か、死骸の傍に落ち散つた短刀一つ、勝子は手早く拾ひ取つて、後の證據に懐中深く秘めました。

してその短刀が君前に持ち出され、嚴しい詮議に家老佐久間七郎左衛門の所持品と知られた時には、佐久間は早くも風を喰つて、家中を脱走して居りました。

「え、残念な！ みすく、仇敵を逸してしまつた。」勝子は泣いて口惜しがりましたが、さて今更如何する事も出来ません。此上はたゞ草を分けても、仇敵佐久間の所在を尋ね出し、許婚の良人八彌の無念をはらさなければならぬ。勝子は遂に復讐の意を決して、殿様の御前に暫らくのいとまを願ひました。しかしながら殿様はお許しになりませんでした。

信行は勝子のために、餞別として正宗の銘刀をたまはりました。

當時齋藤家の勢力と云へば、かなり素晴らしいものでした。道三は名代の亂暴者で、織田、今川など海道に聞えた弓取りの名家からさへも憚られて居りました。

そんなこんなで、織田家では、齋藤道三の許に身を寄せた佐久間七郎左衛門を、我が家の家臣でありながら、此方へ引取つて成敗するといふ譯にも行かなかつたものと思はれます。

勝子は住み馴れたお城をあとに、供もつれず唯一人、ふみもならはぬ美濃路へ入つて行きました。

下々の人の着る木綿の布子の裾高々と端折つて、脚絆手甲甲斐々々しく、菅の小笠を冠つた姿は、誰が眼にも田舎娘とばかり、昨日まで織田家の大奥に事へた其人とは、どうしても思はれませんでした。

さりながら天のなせる麗質は覆はん由もなく、勝子はとすれば道行く人に笠の内深くのぞかれて、

勝子の殊勝な心根を不便に思召すにつけても、年若い女の身の、殊には風にもたへぬ勝子のやさ姿で、どうしてあの髭武者の、あらくれ男佐久間に對抗出来るものではない、さうでもない、かへり討ちなんぞになつては、一層可哀想だといふ御心だつたのでありませう。

勝子は非歎、絶望のあまり、明暮涙のかはくひまもなく、はては食事をさへ碌々とらないと云つた有様でした。

そのうち誰云ふとなく、仇敵佐久間七郎左衛門が隣國美濃國稻葉の城主齋藤道三の許に身を寄せてゐるといふ噂が傳はりました。勝子はもう忍び切れません。今一度君前に願ひの旨を申述べました。信行も今は早強いて引き止める言葉がない。且つは烈しい悲歎にやつれて、凄艶いやます勝子の痛々しさ。

「それでは心して、無念を晴しますやう！」僅かにこれだけの言葉に、千萬無量の思ひを込め

下賤な男共から失禮な振舞をされた事も、一度や二度ではありませんでした。

何のその、いざと云へば殿様から拜領の銘刀打ちはらひ、眼にものみせる事も知つては居るが、身に大事をひかへた今は、何事も忍耐が第一番、勝子は顔の處々へ、殊さら醜げな膏藥をはりつけ、様子を變へて、やつこのことのでめざす稻葉の城下へたどりつきました。

(つづく)